
グレンゼの境界

臨音深霧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グレンゼの境界

【Nコード】

N0075Y

【作者名】

臨音深霧

【あらすじ】

大都市、レゲニアツィオンに5年振りに帰ってきた主人公、エルナ。

「人」と「主」が繰り広げるバトルファンタジー！

焼け野原。どこを見渡しても焼け野原。そんな中、少女は一人、ふらふらと歩いていた。

この焼け野原の中、不思議な事に彼女は無傷であった。しかし、細い手足には力が残っていないらしくやがて、地面に崩れるように倒れ込んだ。

（いけない…私がここで死んではいけない…）

彼女は自分に言い聞かせるように頭の中で繰り返しながら残った力で起き上がり跪く。

瞳を閉じ、顔を上に向け、誰もいない蒼空に叫んだ。

「主よ！私はこの悲惨な戦いに終止符を打ちました！」

「…そうですか」

どこからともなく声がした。それはテノールがかった美声で、例えるならば神のようであった。

「ならば、貴女には名前をあげよう」

そう、少女には名前がなかった。

「貴女の名は『グレンゼ』」

「『グレンゼ』…」

「意は…『境界線』。」

「ありがとうございます！」

少女…グレンゼは瞳を開く。

「主、私が主のお目にかかるのことは許されないのでしょうか！」

「そうですね、今の貴女なら…」

グレンゼは虚空へと消える。

「境ちゃん！」

甲高い声が背後から聞こえた。

「憂！ 久しぶり！」

5年振りに会った友人は少し大人びていた。

「相変わらず綺麗な顔してるねー！」

「憂は相変わらず可愛いね。」

二人はそんな会話をしながら都市の中心部にあるスレシティアンテ大聖堂に向かった。

都市レゲニアツイオン。レゲニアツイオンは一度、壊滅した。まあかなり前の話なのだが。この戦いをレゲニの惨劇と言う。

それからはスレシティアンテ大聖堂に入り口がある『ウラトシ』で『都市再生計画』が行われていた。

しかし、都市再生計画が終盤を迎えるとウラトシは^{ゼンレグ}ZenRegと
いう反政府組織により侵略されてしまう。

先程境ちゃんと呼ばれていた少女、^{つぎやう}宇境エルナや憂と呼ばれていた
^{さみだれゆう}五月雨憂も^{ゼンレグ}ZenRegの一員なのだ。

「5年間ブハイヒに行ってたんでしょ？ どうしてあんな田舎に行っ
たの？」

「私の生まれがブハイヒなのよ。」

「へえー！ そうだったの！ ここの5年で汽車の編成が色々変わったか
らレゲニに来るまで3日くらいかったんじゃない？」

「いいえ、半日で済んだわ。届け屋の知り合いがポスタルスタッズ
まで届け物するから一緒に行かないかって。そこからなら終着駅が
レゲニの汽車がでるからついでに帰ろうかと思って。」

「じゃあまたレゲニに住むの？」

「そういう事ね。ついでに^{ゼンレグ}ZenRegにも復帰することになった
わ。」

「ほんと！ やったー！ また境ちゃんとキャッキャウフフ」しなくて
いいわ」

辺りを見回してみる。5年前と差ほど変わらぬ街並み。都会の冷た
さがありつつも賑わう人々に親近感を感じる。

なんて素晴らしいのだろう！レゲニは少しずつ、緩やかにその名の通り『再生』しつつあった。

「そろそろかもしれないねえ…時。時が満ちるかもねえ…近いうちに。」

男は口元だけで微笑する。

「相変わらず気持ち悪いわダルカル何とかできないのその口調吐きそうだからDU内でもモテないのよプギヤーム9いつぺん死んどけ変態」

「そういう君もすごい喋り方するよねえ…ネイザ。君はロボットなのかねえ…ネイザ。ま、そんな君の全てを愛しているんだけどねえ…好きだ。」

「気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い死んどけ」

「ネイザはツン期なんだねえ…可愛い。」

「ダルカル、そろそろやめとけ。」

二人が驚いて振り向くと長身の男が立っていた。

「和久貴方いつどこからどうやって入ってきたの気づかなかったわ」

「ダルカルが時が満ちるとか言ってたときにそこの扉から普通に入ってきたただだが。」

「流石、忍者大国出身だけのことはあるねえ…感心。」

「そりやどうも。」

「で、君が居るって事は麻依ちゃんも居るんだよねえ…絶対。」

「あーったりまえなのー！」

ていつ！というロリ声と共にちっちゃい女の子が飛び降りてきた。

「麻依はいつ何時も兄者の傍にいます！」

和久の腰に後ろから抱きつく。

「イラつくイラつくイラつくイラつくイラつくイラつく」

ネイザは麻依に鋭い目を向けた。

「ネイザ姫こわーい」

「何でなのかねえ…不満」

今度はダルカルが和久に鋭い目を向けた。

「何で君みたいな影薄男かげうすおとこがモテてこの僕がモテないんだろうねえ…不公平。」

「まあ皆落ちつけって。」

和久がその場をなだめる。

「ところで、ダルカルの言ってた『時が満ちる』って何のことだ？」

「おーっと、……………忘れるところだった。」

ダルカル…ダルカル…ニースはいきなり人が変わったように喋りだした。

「ネイザミア…フレイ、河内和久かわちわく、河内麻依かわちまい。時は満ちようとしている…」

「その喋りは…『主』あるじか？」

「左様。君たちを呼び出したのも私だ。」

「で？満ちるとは？」

「グレンゼ…グレンゼが復活しつつある。」

「グレンゼ…ですって!？」

3人は息をのんだ。

「グレンゼが…」

「そうなのです。地上に墮おりようとしているのです。」

一方のエルナに身を借りた『主』あるじもグレンゼの復活を告げていた。

この世界には稀に神：と言うよりは神に近い存在、『主』あるじを自分の身に取り込み声を聞いたり力を借りたりできる者がいる。

そんな者達を人々は『エンゲル』と呼んでいた。ダルカルもエルナもエンゲルである。

主の姿は取り込んだ者さえも見る事ができず、主あるじに認められた者しか見ることはできない。

主あるじに認められた者は主あるじと同等の『神に近い存在』になれるらしいのだが、そんな者は未だに一人…グレンゼくらいしかない。

「グレンゼは今も彼女の境界の中で静かに復活の時を待ち続けます。彼女が人間の中に取り込まれればその人間はキャパシティーバーで逆に彼女に取り込まれ、彼女は段々と力を増していくでしょう…」

「グレンゼの力ってそんなに強大なの？」

「はい…なんせ主を取り込んだうえに自分も主あるじになれる程の力を持つているんですから…」

「つまり、主あるじの力2倍って事ねー」

「いいえ、確証はありませんが彼女はもしかしたらもう一人、主あるじを取り込んでいる可能性があります。」

「げっ…つまり3倍…」

「ええ。それくらいの力が無くては境界など造れませんから。」

グレンゼは異次元に『境界』という自分の世界を持っていた。彼女はレゲニの惨劇が終戦した直後、境界を造り、そこに住んだ。

異次元の境界であるため、歳はとらないらしい。

「…グレンゼの力を欲している者が話を盗み聞きしているかもしれませんが。話の続きはスレシティアンテ大聖堂に戻ってからの方がいいでしょう。」

主からエルナに戻ると二人は急ぎ足で大聖堂へ向かった。大聖堂の前まで来ると、小さな女の子がエルナを見つけ、顔を明るくさせた。

「エル姉！」

「あ、ムーちゃん！」

ムーちゃんと呼ばれた少女はとてとて走ってくるとエルナの前に姿勢正しく立った。

「ムーちゃんおっきくなったねー！今年で何歳になったんだっけー？」

「9歳になった！」

ムー＝フィオネはZenRegの最年少メンバーで、エンゲルやグレンゼの研究チームに4歳から所属している。

「あ、そういえば憂姉、セグ兄に呼ばれてたよー！」

「はい、じゃあ早速ウラトシに入らなきゃ。」

大聖堂の重い扉を開けると、二人のシスターが出迎えてくれた。

「ウラIDとウラPASSのご呈示をお願いします。」

「ID、ANURE。PASS、The Blue God world ten Gerechtigke it【青き神に正義を求む】。」

「

「ID、RAIN-5。PASS、Alles was regu
n und nassen【全てを濡らす雨となる】。」

「ID、MUF。PASS、Ich bin fur die
Welt【私は世界の為に】。」

「確認がとれました、ウラトシへ行つてらっしゃいませ。」

シスター達が口をそろえて言うと言の前に光の扉が現れ、開いた。

「5年振りかー」

エルナは扉に足を踏み入れた。

「主……」

少女は隣に座る主の腰に手を回す。

「主……レゲニは再生しつつあります……少しずつ、緩やかに……」

「そうですね」

主は少女の頭をなでる。

「私……レゲニを惨劇が起きる前のレゲニに戻したいの……だから……地上に墮りて革命を起こすわ。」

「君の好きにすればいい……グレンゼ。」

グレンゼは薄く笑う。

ウラトシは5年前と変わらず、Zen Regの者達が慌ただしそうに働いていた。

「おー、あれ、エルナじゃね？」

「エルちゃんだね。」

「境ちゃんだあー！」

「おっ！杯ブラザーズじゃないの！」

背の高い方から杯黒徒、杯灰徒、杯白徒。さかすきはくと さかすきはいと さかすきはくと三つ子である。

「皆元氣そうでよかったー！黒徒の中の主さんはどう？」あるじ

「ああ……」

「……グレンゼの事聞いたのね。」

「お前も聞いたのか……」

一瞬にして空気が重くなる。

「憂姉！そろそろ行かないと、セグ兄待ちくたびれちゃうよ！」

ムーは空気を変えるため話を切り替えた。

「あ、そうだった！ムーちゃん、セグのところに案内してくれる？」

「はい！」

「……場所を移そうか、ここじゃ何だしね。」

四人はエルナの荷物をフロントで受け取ってから今日からエルナの住む部屋へ向かった。

「おう……5年振り……」

私がない間誰も使っていなかったらしい。置いていったベッドや机、本棚の位置は変わっておらず、懐かしく感じた。

「誰も使わなかったのね。」

「エルナが戻ってくるかもしれないからって管理チームが誰も住ま
せなかったんだ。」

「そう……」

「それに、境ちゃんの世界に何十人しかいないエンゲルだしねー」
「あ……」

エンゲルと言うだけで別格視される。エルナはそれが嫌だった。

（私は只、主の声が聞けるだけで他の子と何一つ変わらないのに……）
神は不公平だ。

「神は何故、主を作り出したのだろうね。主は何故、人間の味方をするのだろうね。人間は何故、主を取り込んだ者をエンゲルと呼び崇めるのだろうね。私は何故……エンゲルに選ばれたのだろうね。」
エルナの本音だった。

「灰徒、白徒。部屋に戻っててくれないか。」

「黒徒兄さん……」

「いいから。」

二人は渋々部屋を出て行った。

「……ありがとう……黒徒」

灰徒と白徒は気づかなかったようだが黒徒は気づいていた。エルナが泣いているのを。黒徒達を心配させないように、静かに泣いているのを。

「俺だっと思うさ。なんで俺がエンゲルなのかって。でもしようがないじゃないか。神が主を作り出し、主が人間の味方をし、人々がエンゲルと呼んだのだから……！」

「……だから、誰かがやらなきゃいけないんだよね……」

「……………」

それ以上言葉を見つけられなかった。

「こんな事してる場合じゃないや……まずはグレンゼを……グレンゼを……」

エルナは言葉を詰まらせた。

「グレンゼを……どうすればいいの？」

「どうすればって……倒せば……！！！」

黒徒も気付いたようで言葉を詰まらせた。

エンゲル達は、グレンゼが復活すると聞いただけで、『何のために』

グレンゼが復活するのは知らなかったのだ。

「グレンゼはレゲニの惨劇を終わらせた英雄でしょう？じゃあ、レゲニやこの世界に害を与えることなんてする理由が無いじゃない！」
正論だった。

「…主に詳しく聞いた方がよさそうだな…」

「その心配はないよー！」

ガチャッと扉を開ける音が聞こえたかと思うとそこにはムーと憂とセグロイがいた。

「やあ、エルナちゃん、久しぶり。」

「セグロイ！久しぶり！」

「ははっエルナちゃんは相変わらず僕のことをフルネームで呼ぶんだね。」

軽く挨拶を交わすと憂が話を切りだした。

「戦闘チームのあなた達にお仕事よ。」

ZenRegは研究チーム、整備チーム、戦闘チーム、護衛チーム、管理チーム、医療チームの6つに分かれてそれぞれの仕事をこなしている。

「研究チームの観察班から報告があつたの。レゲニの外れにあるベックア ril でブラックホールみたいなものを見つけたって。」

「ブラックホール？」

「みたいなものよ。調査によると中は別の世界へつながってるみたい。」

「入ったら帰って来れなくなるとかは？」

「それもないみたい。」

「ただの出入り口ってところか。」

「そういうことね。」

「それでねーエル姉達にはそのブラックホールみたいな出入り口の先はどうなってるかを調べてもらいたいのー！」

「出現したのが丁度世界中のエンゲル達にグレンゼの復活を告げられたときと同じなの。だから、グレンゼの件と何かリンクしている

のかもしれないわ。」

「そう…で、誰が行くの？」

「エルナちゃん、黒徒くん、灰徒くん、白徒くんの4人で行ってもらう。」

「わ…私たち!？」

「な…なんで俺らが…」

「管理チームが決めちゃったことだからしょうがないよー。それに境ちゃん達なら大丈夫だって!」

「えー…」

「決行は明日の午後2時。それまではゆっくり休んでちょうだい。境ちゃんだつて帰ってきたばかりで疲れてるでしょう?」

「うん…ありがとう。」

「ほらほら、みんな部屋から出よう!じゃあまた明日ね!」

「うん、また明日。」

憂はほらほらーとみんなを促して部屋から追い出すと最後にエルナに手を振って部屋を出ていった。

(久しぶりの任務ね…)

時刻はもう8時を越えていた。

皆さんはじめまして。臨音^{りんねみむ}深霧と申します。

こちらに小説を投稿させてもらうのは初めてになります（ドキドキ

キーワードに「恋愛」とか「戦闘」と書いておきながら
まだ全然出てきてませんごめんなさい；；

この「グレンゼの境界」は臨音に珍しく世界観が外国だったり
google先生を頼りにしながら少しドイツ語を組み込んでみた
り。

色々不備があつたりするかもしれませんがこれから宜しく願いい
たします！

【ドイツ語：日本語】

グレンゼ：境界線

スレシティアンテ：裏都市

レゲニアツイオン：再生

エンゲル：天の使い

ブハイヒ：野原

ポスタルスタツズ：郵便街

ベックアリアル：路地裏

（ここはどこ？）

（分らない）

（あの女の子は誰？）

（あれは私ね。）

（宇境エルナ）

（ずいぶん小さいね）

（幼いときだね）

（9歳くらいの時かしら）

（あの子はここで何をしているの？）

（わたしはここに…）

迷い込んだの。

「ここはどこ…」

どこかで見たことある街並み。私の住んでいる街に似ているけど何か違う。そうだわ…歴史の本で見たことある、100年以上前のレゲニアツイオンだわ！

少女ははしゃいだ。

本でしか見たこと無い世界が目の前に広がっている！すごいわ、すごい！

でも違和感が一つ。賑やかなレゲニの筈なのに、人が居ない。

「…帰りたい…」

「どうしたのかしら、お嬢ちゃん」

後ろから綺麗な女の人が声をかけてきた。

「おうちに帰りたいの。この世界に私のお家はないから。」

女は一瞬驚いて目を丸くさせたがまたにっこり笑って

「そうなの…じゃあ元の世界へ帰らなきゃね。名前は？」

「宇境エルナ！」

「エルナ…！？」

「私の名前：おかしかった？」

「いいえ、違うの。ごめんなさい。さあ、貴女は帰らなきゃ。エルナ。あそこのお家の扉を開けば元の世界へ戻れるわ。」

「ありがとう！お姉さん！」

私は振り向かずに扉を開けた。：お姉さんの名前も聞かずに。

「ふわあゝ…またか」

幼いとき、100年以上前のレゲニに行ったときの夢。100年以上前のレゲニは今でも鮮明に思い出せる。それ程印象的なものだったのだ。

それにあの日の夜だった。エルナの前に主が現れたのは。

（貴女は世界を守らなくてはいけない、だから私は貴女のことを守ります。さあ、私の名を唱えるのです。）

と名も知らぬ声に言われたのだった。でもエルナは知っていた。見たことも、聞いたこともない筈の彼女の名前を。

「G?ttin【青の女神】…」

あの日からエルナはエンゲルになったのだ。

「さあて。支度支度つと。」

ZenRegのメンバー全員に配給される白い布地のコート（改良可）に腕を通す。

（ちよつとちつちやいかな。ま、5年振りだしね。後でサイズはかつてもう一回作り直してもらおう）

とりあえずもう片方の袖にも腕を通す。

「エルナ、エルナ、」

実体のない主が自分に呼びかけてきた。

「なんででしょうか？」

「今日のことなのですが…」

「？」

「少し、嫌な予感がします…」

「どんな？」

「DUも動き始めているようです…」

「ダルカルのお告げでか…」

「はい…」

あるじ主は微弱ながらもネットワークのようなもので繋がっており、あるじ主同士で情報交換などできる。それに多少なら相手の場所、行動、思考などが分かる。

「ベックアリのことも既に知っているようです。」

「ふーん、やっぱり情報源は河内の二人かしら？」

「そのようです。」

「あの子達どこで情報買ってたのかしら」

「エルナがレゲニに戻ってきたという情報も買ってるみたいです…」

「そんな情報まで…というか要らないよねそんな情報。」

「エルナはエンゲルのうえ、センレグZenRegの大事な戦力ですからね

…」

「そうかなあ？」

そんなこんなを言っているうちに支度が終わったエルナは部屋を出て食堂に向かった。

「おはようございます。」

食堂の入り口に立っているシスター達が挨拶をしてきた。エルナはぺこりと頭を下げる。

ぜんれぐZenRegの護衛チームは9割がシスターで構成されているのでウラトシ内にはかなりの人数のシスターがいた。

「あら、エルナちゃん久しぶり！」

「アルタさん！」

「エルナちゃんいつものアレでOK？」

「はい！」

管理チーム所属で料理長のアルタ。エルナのお姉さんの存在でエルナがセンレグZenRegにはいった頃からお世話になっている。

「境ちゃん！」

声のする方を見ると憂とムーとセグが朝食をとっているところだった。

「はいどーぞー！」

「ありがとう！」

料理を受け取ると3人のところへ行った。

「おはよう、エルナちゃん。」

「おはよー！」

「おはよー！」

「三人ともおはよう。」

「朝食をとりながらで悪いんだが今日のことについて少し。」

「あ、うん。」

「あの中は4次元らしくなっているみたいだ。」

「だから、どんな世界にとばされてもおかしくないの。」

「例えば、過去や未来、パラレルワールドとかね。」

「お…おう…じゃあどうすれば…」

「大丈夫！ちゃんとかと策はとってあるよ！はい！」

ムーがエルナに向かって何か投げってきたのでエルナはあわててキャッチした。

「…チョーカー？」

「ご名答！エル姉にはソレをつけて飛び込んでもらいまふ！」

「ムーちゃん…口に食べ物詰め込みながらしゃべらないの…」

「ふみまへん（すみません）…っと。で、そのチョーカーにはありとあらゆるものはかる機能が付いてて、そのチョーカーから送られてきたデータを私が分析しながらエル姉たちを時に流されないように指示しまーす！」

「は…はあ…」

「むう…私を誰だと思ってるのー！」

「神の頭脳だー！…だろ？」

「お、灰徒おはよう。」

「おはよう、今日の打ち合わせ？」
「そんなところ！」
「はい、灰徒くんもこれ。」
「チョーカー？付けて行けばいいんすか？」
「安全保障のためにな。」
「了解す！」
「黒徒と白徒にも渡しておいてー」
「へーい。」
「じゃ、私たち研究チームはお先に。」
「もうちよつとゆつくりしてけば？」
「いいんだ、今日の任務の最終確認があるから」
「そっかー…頑張つて！」
「エル姉もねー！」
「お、ちようど3席あいたから兄さんと白徒でも呼んでくるかね」
「お！いいね！私待つてるわー」
久し振りに味わう任務前のテンション。

「ははあーん。これが噂のブラックホール風出入り口かー」
「とりあえずダルカルとネイザが来るまで待つて「ダイブイントウ
ブラックホール風出入り口ー！」
「麻依！待て！」

河内兄妹はブラックホール風出入り口にダイブした。

「やっぱりねえ…予想通り。」
「何が予想通りなのよ」
「ブラックホール風出入り口に飛び込んでいったねえ…麻依ちゃん。」

」

「ということはまさかまさか」

「和久も飛び込んでいったねえ…後から。」

「今すぐ和久じゃないわ二人を連れ戻しに行くダルカルも来なさい」

「今、和久だけって言おうとしたよねえ…まあいい。あと30分待つてくれないかねえ…30分。」

「なんで」

「僕らが今動けば最悪の未来が待つてるからねえ…待とう。」

「…」

弾丸のようなしゃべり方をするネイザが珍しく黙った。

ダルカルの主、^{あゐじ}Prognose【未来予知】。

彼は0.1秒以上先の未来なら全てを知ることができる。

しかし体力の消耗が激しいため必要以上には能力を使わない。

「兄者！兄者！なにここすごい！異世界！？」

「こりや100年以上前のレゲニだな。」

「レゲニ！？レゲニなの！？すごい！すごい！」

麻依はしゃいでいた。

（やべえな…）

和久は事前にダルカルから聞いていた。

麻依がここに飛び込むことも飛び込んだ先が歪んだ危ない世界だということも。

麻依はどの未来を選んでも別世界へ飛ばされないが和久は下手に動くと別世界へ飛ばされると言われた。

（ここで待機か。）

和久は地面に座り込むと5秒で寝始めた。

『これより任務を開始します。そっちの準備はいい？』

首もとのチョーカーから憂の声が聞こえてくる。

「OK。四人ともばっちりよ。」

『よし、飛び込め！』

四人は勢いよくとびこんだ。

「…？」

「あれ…これうまく飛び込めたのか？」

「もしかして異世界飛ばされた？」

「いや…違う…」

エルナは眉をひそめた。

「ここ、100年以上前のレゲニだわ。」

「マジかよ！」

「すげー」

「境ちゃん物知りだねー」

「ちがう…の…それだけじゃ…ない…」

「エルナ？」

「わたしはここに…来たことがあるの…」

「!？」

「確か私はこの通りで…」

「どうしたの、お嬢さん」

四人は声のする方に顔を向けた。

はじめまして。1話を読んでいただいた方はお久しぶりです。臨^{りん}音
深霧^{なみむ}と申します。

2度目の投稿ですがやはり緊張します（ドキドキ
いつになったらこの緊張になれるのだろう…

なんだかやつと始まってきたって感じですね！
書いていてすごく楽しいです^^

色々不備があったりするかもしれませんがこれからも宜しくお願い
いたします！

【ドイツ語：日本語】

G?ttin：女神

Prognose：予知

Schatten：影

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0075y/>

グレンゼの境界

2011年11月21日09時40分発行